

[分類] 普及技術

[成果名] パセリ軟腐病防除にスターナ水和剤が有効である

[要約] パセリ軟腐病防除にスターナ水和剤の2,000倍液を散布する。多発生条件下では効果が劣るため予防的に用いる。

[担当] 南信農業試験場 病害虫土壌肥料部、農業技術課 専門技術員

[部会] 病虫部会

1 背景・ねらい

パセリ軟腐病は防除薬剤が少なく、防除体系の組み立てに非常に苦慮している。パセリ軟腐病を安定的に防除するため効果の高い薬剤を選定するとともに、パセリに対する薬害の有無を検討するために平成17年に試験を行った。平成20年に登録になったため、今回普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

(1) パセリ軟腐病防除にスターナ水和剤の2,000倍液を散布する。

農薬登録内容

[一般名及び成分含量] オキシリニック酸 20%

[毒性] 人畜毒性：普通物 [魚毒性] A類相当

[対象作物に対する適用登録状況(平成21年2月16日現在 JPP ネット確認)]

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	オキシリニック酸を含む農薬の総使用回数	使用方法
パセリ	軟腐病	2,000	収穫21日前まで	2回以内	2回以内	散布

3 利用上の留意点

- (1) 多発条件下では効果が劣るため予防的に用いる。
- (2) 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、本剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とローテーションで使用する。
- (3) パセリ軟腐病は収穫や芽かきによって生じる傷口から菌が侵入する。高温多湿条件や多肥条件が発病を助長するため、排水をよくするとともに施肥管理に注意する。また、連作を避ける。

4 対象範囲

県下全域

5 具体的データ

- (1) 南信農業試験場の試験では、無発生から散布を開始し、7~9日間隔で計9回散布を行った。気温の上昇とともに発生が認められるようになり、最終的には反復1で少発生、反復2で中発生となった。少発生の反復1で、スターナ水和剤の2,000倍液散布は防除効果が高かった(防除価100)。中発生の反復2で、スターナ水和剤の2,000倍液散布は程度が低いものの防除効果が認められた(防除価33)。以上のことより、スターナ水和剤の2,000倍液散布は、

対照のジーファイン水和剤と比較して優り、発生が多い条件では程度が低いものの防除効果が認められた(表1)。

- (2) 中信農業試験場の試験では、無発生から散布を開始し、7日間隔で計4回散布を行った。最終的には反復1では少発生、反復2では中発生となった。少発生の反復1で、スターナ水和剤の2,000倍液散布は防除効果が高かった(防除価100)。中発生の反復2で、スターナ水和剤の2,000倍液散布は程度が低いものの防除効果が認められた(防除価40)。以上のことより、スターナ水和剤の2,000倍液散布は、対照のZボルドーと比較して優り、発生が多い条件では程度が低いものの防除効果が認められた(表2)。
- (3) 葉への汚れ及び葉害は認められなかった。

表1 パセリ軟腐病に対するスターナ水和剤の防除効果(平成17年 南信農業試験場)

供試薬剤	倍率	反復1			反復2			薬害
		調査株数	発病株率(%)	防除価	調査株数	発病株率(%)	防除価	
スターナ水和剤	2000	22	0.0	100	22	45.5	33	無
ジーファイン水和剤	1000	22	9.1	60	22	50.0	27	無
無処理		22	22.7		22	68.2		

試験場所：南信農業試験場露地圃場

耕種概要：品種は「カーリーマウンテン」5/10定植、施肥は、野菜基肥(15-15-12)を20kg/a(窒素成分で3kg/a)、牛糞堆肥180kg/a、苦土石灰100kg/a施用した。株間25cm、畝幅1m 2条千鳥植え

区制・面積：1区22株 2反復

薬剤散布：H17 6/14,6/21,6/28,7/5,7/13,7/21,7/28,8/4,8/13の計9回 7/5,8/4の2回降雨があったが、散布後乾いてからの降雨であり影響はない。

調査方法：最終散布7日後の8/20に全株について発病株の有無を調査した。薬害は随時観察した。

防除価 = 100 - (処理区の発病度株率 / 無処理区の発病株率) × 100

注意：本試験においては、純粋に殺菌剤の効果を判定する目的のため、また適用登録決定以前に実施されたため試験における散布回数は適用登録を超えた。

表2 パセリ軟腐病に対するスターナ水和剤の防除効果(平成17年 中信農業試験場)

供試薬剤	倍率	反復1			反復2			薬害
		調査株数	発病株率(%)	防除価	調査株数	発病株率(%)	防除価	
スターナ水和剤	2000	26	0.0	100	24	25.0	40	無
Zボルドー	800	25	4.0	77	24	25.0	40	無
無処理		23	17.4		24	41.7		

試験場所：中信農業試験場 露地圃場 区制・面積：1区4.8m(32株供試)、2反復

耕種概要：品種：マウントグリーン 定植：H17 4/18 栽植距離：株間20cm 条間45cm 二条植え

10aあたりパーク堆肥5t、鶏糞300kg、油粕20kg、尿素100kg、BBみどり300(13-10-10)100kgを基肥として施用し、

5/8に10aあたりBB追肥30号75kg、硫安50kg、尿素100kgを施用した。

薬剤散布：H17 8/15,8/22,8/29,9/8の計4回 展着剤は加用しなかった。

調査方法：調査は9/14(最終散布6日後)に全株について発病の有無を調査した。

防除価 = 100 - (処理区の発病株率 / 無処理区の発病株率) × 100

薬害は随時観察した。

注意：本試験においては、純粋に殺菌剤の効果を判定する目的のため、また適用登録決定以前に実施されたため試験における散布回数は適用登録を超えた。

6 その他特記事項

[公開] 制限なし

[課題名、研究期間、予算区分]

病害虫の発生予察と防除技術、平成17年(2005年)、県単素材開発